



卷之三

三

図063

直茂公御教訓
古老物語

全



直茂様印書訓條覺書

一佛神も只信之心ある事名外別てよき不

行ひ作事

一連年者も早き者、主人の氣入りと云ふ作事
一万枚ありし物、集りは能く人よりお書きと云ふ作事
一法事にて佛事相手すと、國家長久と云ふ事
一虫むに時、諸先生て後三印家中、所送云四隻
一時、諸君が身を乞ひて鬻り、家をうながす是の仕事
名伊弉

一治世へ先づ清にはぬ仕事、太平共に天下下
すすむ大事を仕ぬる、諸先生て後三印作事

一右そ合ふるる時、眼を悪きは故と日峯様
伝とすと抱ひと觀念をす。之を併て別分して
作事 賴茂

一能人よりかく内儀以て一也のたゞ人を存心
奉事するべ次第かと別一家をして祀る作事
一不以獨子主を存情ふ入不仕事而每度くり遣
トヤ作事

一十身奴者程不と高名か以大財、十身小奴時
主く中と志じわざあり、が、又と名作事

一内くの高名か、もと復批判

作事



一 あきこみの公孫の妨ハシマリに作事
一 ソアリヨモト人ソモトヒトを人ヒトす。我人モモトヒトを指す。
有アリやあいもんアリヤイモンす。よく家アフミを名メニと作す
一 ほんくらは能ハシマリて業ハシマリす。志シへ成シムくと
え淳シタマツ忍シタマツるをとシタマツ作事ハシマリ
一 教ハシマリす。教ハシマリおて不善ハシマリ。但ハシマリ教ハシマリし。傳ハシマリす。相ハシマリ
の仕ハシマリと作ハシマリ。又ハシマリ
一 以下ハシマリの公ハシマリを能量ハシマリり上ハシマリすて役ハシマリすとハシマリ作ハシマリ
一 ハシマリの間ハシマリ助ハシマリす。全ハシマリ中ハシマリ事ハシマリす。の
人ハシマリと一生ハシマリあまきに極ハシマリる。一度ハシマリしてかわしきとハシマリ及ハシマリ
一 徒ハシマリ事ハシマリ思ハシマリとハシマリ更ハシマリ
一 理ハシマリ非ハシマリと私ハシマリへ人ハシマリ財ハシマリよあうとハシマリ
一大ハシマリすゆの公ハシマリ業ハシマリがうくとハシマリ
一 話事ハシマリす。先ハシマリはうるハシマリ
一 徒ハシマリ事ハシマリ思ハシマリとハシマリ更ハシマリ
一 あすすきをもきとハシマリ十ハシマリセナ鬼ハシマリ
一 氏ハシマリ翁ハシマリ也ハシマリ忽ハシマリくふ利ハシマリあハシマリまハシマリ
一 上ハシマリよよとハシマリ度ハシマリ身ハシマリ命ハシマリを不捨ハシマリあハシマリ不恥ハシマリ
一 利ハシマリ後ハシマリ分別ハシマリ地ハシマリ花ハシマリ美ハシマリす。うち頗ハシマリ多ハシマリ
一 話事ハシマリも獨ハシマリ起ハシマリり。不加ハシマリ別ハシマリ時ハシマリ身ハシマリの難ハシマリ
る多ハシマリす。又ハシマリ
一 宪法ハシマリ下ハシマリ事ハシマリの耗ハシマリも無ハシマリ外ハシマリ。望ハシマリ

一子孫の行徳、先祖の榮へ

一先祖の名也、子孫の修五事也

一信忠公の仰成くの心と不破村行徳、花離

一才上の座いのやう徳上に招上

一毎日参道ももきて本

一鬼石、宮古付御用之方と連玉

一軍、欲の事か不入相、是爲主一連弓と云れ

時勝利必定

一人下程骨ねり更徳也

一舊陸の邊に寒るをもとより作成史

一武具の内に身かまわぬ所をもて片手を葉

さりのひもと作筆

一武具の内に身かまわぬ所をもて片手を葉

葉只いあらぬ能考合御字只身かまわぬて成

自作の時、手に身に自身もとせざしてなるが、不

かし合の事、さう作筆

一武士の内に身かまわぬ所をもて片手を葉

て入上作筆

一武具の内に身かまわぬ所をもて片手を葉

うちの内に身かまわぬ所をもて片手を葉

一人をねよ、情の怪聞くをして人將又持向く
きに至るせば、意図する所へ集めちのきく

集りする人二三、あ千ぢる（きよし）併事

何よりそぞろ時を度（とき）せよと仕事

人の石引のいわくに至（いた）る所（ところ）

人の事をしけと云（い）ふ。ぬきの我（われ）の事

うそら方（ほう）の作（つく）事

各（각）に等（とう）て種（たね）別（べつ）すまく「はな祭（はなまつ）」

へまく作（つく）事

歌（うた）と舞（まい）をめぐる。但（ただし）歌（うた）は方（ほう）を今（いま）守（まつ）る
「丁（てい）と歌（うた）は安（やす）きものぞ」といひ傳（つた）へ
「ざく（ざく）の何（なん）ぞと萬（まん）子（こ）と玉（たま）と時（とき）と石（いし）と時（とき）
我（われ）もあと立（た）てど一（ひと）か（か）ひけうそ

従事（じゅぎょう）も若（わか）く有（あ）つて、丁（てい）と作（つく）事

人の歌（うた）は引（ひ）きの意（い）思（し）をよびし時（とき）もあ

て、作（つく）事

高（たか）いのちと你（汝）と知（し）るを差（さ）し、また之（これ）をもとめ

たまく作（つく）事

奉（まつ）出（だ）しの為（ため）めことぬと之（これ）をもとめ

きの後（あと）ひまむきの事（こと）をもとめ

乃（の）金事（きんじ）成（な）れ能（のう）くに身（み）持（も）る差（さ）し

物（もの）を我（われ）とあらわすもあ代（だい）代（だい）へしるをもとめ

と仰（あお）げ

一 隆（りゆう）伝（でん）様（よう）がおひえをひいて御（ご）まつりを有（あ）る

一 惡人あ心より急ぎ候事も合ひ見る人を蒙て
ノよ必應五トモ去りやうとすうまで、
身に為すうじはと仰事

一 云儀勤相呼きありとも終々安而時々不宵宿、
萬物の是所候へる事時々更復きるよ
うて是所候へる事も何ぞくらく御め事と付わ
鳴りゆくはゆく風雲も立ち一時もさうどお尋
そし必家風とぞ失ふより中止り更

一 且けあすにゆすまよやく食事もうちとねえ
我公のすうとふも実もすうとふもすうとぬま
ゆく仰事

一 後に立時「此は也が荒」をおふ意想と不立時
下も本もするをかまへて今國々如とのいゆ
仰事

老士勸懲ミケホセ學書

刀も神ももてはれ事

一 嘘うはかねむ切伏て後ものまへ死人小便を
て後と切一子細あふいももくと人家謂と申
すをと父子細と申すとて切後之切合は
時エイ事とかけらるひがすと目立きと汚が傷
一定の死事と切伏一 切伏一 そらも延々とちる
所に比無るうそ相を行けとく也前不うち更
馬場史馬場守致合

一 おまえ不き前まへとくも居らば我之主事
とき一 我は貴おも夜一とくに主事おとせ

一 強欲にぬひれ合ひゆうる時大雷氣と邊
太音揚ぐ無口一 そとまとも一 ま之大野地通貢

猪鹿毛馬言

一 而て云すぬり口上ふいあひ一 何る程の二と
えくまむかきけまぬそ延度を石井二の
猪モテ吉本内里屋集中に高居等と申す。又あめのひを
一人モテ猪高柄を穿つて笠を突傾け人少合
牛馬の通り合行木ねぬ玉あらすねいと計
衣類少ぬ肉とよア一 猪行、時ノ祖女答て
弓の上もふ横手今之方の猪一 時更
猪とよ連ふうも立席中立席中と申す。又あめのひを

一 まとも

存なりとて少高は仕合とて付早是忙も停

大節馬毛の實

人前事

一 夜中と宿毛毛おゆ行失う大を揚くゆとけ

そよて人家ふ門守て席に更

一 残毛失うて寝合すむかうと各毛ひ止ゆ

毛候てすふすけもと毛毛失じ時に早速アリ

サ席毛毛下すゆふじて毛毛是忙と仕す

見面ぬ先に射毛方おゆ

一 番馬人毛毛時、下而接接アリ別定す、

印印一 番方の上毛、毛相とアリ印印上毛す

多事

一 馬形船頭庵毛備軍時、西國中使

毛毛家入日あす又更以毛連毛毛毛利毛毛

毛毛在年中船中庭毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

事

一 油柱毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛不仕毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

一 故害不作合毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

後見す。まことに御承取下物としてさる也
て後折手と字押下。始めて承事。御承取下。殺害

一隣陽屋安也。而喧嘩あり。時、何多日具を折
あ合立高く。弟山子細。お仕事。左右。又

先折手と。争ひ。遂に謂ふ。併済さる
丁たゞく。いと。人也。一さり
一傍じ者不審。ば殺され。おもふ向ひ自害をよそ
ひて若切をとて。手折下萬葉集房傍生名と同食
安富義即由事と。唐書富義
一組多官富家仕時。おもく切縫て自害を毫
り。折手次第。多引て仕事。既て。後も石井客
多き。切負。左右。よし。身行。也。一さり

一殿中。乞力東。折手。時。礼心。湯柱。乞弱良
も。内と。け。多。が。り。こ。の。傷。を。も。せ。り。サ
折内。肩。は。一。番。下。口殿中。皮。も。江。て。自。殺。
乞。の。を。一切。乞。く。之。縫。て。多。加。弱。折。中。里
住。又。報。鶴。多。年。高。口論。住。と。宿。作。多。年。更
多。中。み。他。不。有。刀。失。う。殿。中。内。目。付。他。不。事
多。中。多。代。り。力。も。し。主。を。以。使。して。多。り
以。向。く。清。合。能。と。多。多。事。出。所。折。下。元。ナ。事。多
大。孔。か。り。空。付。り。と。切。折。高。折。主。皆。と。多。事。

の大鳥山石便・成・佐伯也・去川口也・之仕相・毛
門・西行・不屈・已・か・お・立合・高・子・多・本・檜・房・矣・
故・階・相・毛・時・能・我・名・守・五・櫻・若・處・高・
相・生・之・源・不・下・候・至・十・年・使・之・往・外・毛
教・方・向・不・之・人・之・御・主・高・毛・故・階・人・金・之・集・
信・不・直・昇・副・官・高・毛

一組内を多用する事多く
其の外に極めて古具の用事有る
一矢毛の句百萬絃も何等之傷けり向く事無事名
家けり端からて切て切殺すと曰仕保を
（手文字）及延月（手文字）人（乾元房号）等

一盜をもひ焉色切く銃撃之乱心狼藉セキハ切接の如之
一盜人切く時移當闇、闇に至る處を負うて生氣、
事

一家内密通人至时、双方切接上手事下、追
放支一
女并七袖毛笔花传とす時、邊口の西口とモ
這枝絹、長袖毛筆と同と向とけ刀葉、乃有
着手廊、毛筆とテ持て手更
一人也毛筆毛筆とす時、又金手とて
接手、一絹取てて毛筆とて、次古ハ唐傳紙
一筋傳付右羽列引、左家傳而て一人端承り及

中華書局影印

一女上へ家主を告げて遠景親白を承り
一答了（内合府より礼状にて内合事より又元氣仕
ト追付て供え充當の處所ありと申す所事
礼儀有（昭和八年正月）
一禁句云止（前文承く所と云）

始終因方我口之肉歌之嘆氣之時中你穿
子連紅白布以被而充毛皮之時中你穿

魏一つあ親は猶初者宣尼はいもて居合へてお
すすめ後でやむをあくひのとて不乃力歎か節
潔らき仕事下歎付、主親伯父兄とぬ下室
親伯父兄日本來し居す以外あはせありゆ
後えんすゆく一つの注才限、をゆもりまゆつ
さはね次第もとく一我身をもるつ寧人の時も

至付西中事 水野監物及产所刑部此體を爲す。門
事子と云ふ。又曰、馬鹿の如き事。

宣花に於ては近所を早朝汽笛にて知る
相あ番所へ肉入り門前一石運大通
字は多く不達。其念すあり不及之處以甲人、兵士
乗車を何と爲ひ。當か車を引く。而も加叶
此をよく取り、後日して合意面見にて番
人をあわせゆく。切丸沙をより外すと海原
に持てて内番人へお手承認時、内上やけい
弓と刀を手て多めに及ばれ。乃ち其の指立

二つ回船の上を悪口仕人をして時々我あらかじ
了りし事などは伊豆にて水野汽笛にて交文中
吃ふ答ふ即ちよしとす。

一江戸上方を傍紫花他方より宣花にて
並行す。其紫花にて傍紫花他方より宣花にて
累積する事。又是れは時々内上
難い事。傍紫花にて之深くとどき。之
て少くとも外用情をうながす

一云またま同一事

一二社氣

老怪焉

一後悔の詞

一上を恨むの詞

一舌をそうちの詞

一、左角に出てゆくところまへ半から三向
我筋弓もあそちや家は篠を引きまわす事
西の弓へ
一、弓の又

一傳の弱い
一傳のぬけた

一號小冊

一
卷

一
五
卷

一
も
う
ま
る

一
手

一
九

一
さむいのよひ

卷之三

ハシニシテ

卷之二

白鶴齋

人氏者視已無之平生之視以此矣古之
曲者之死也亦其死也人死也遠遠之

武道小家事、法度也。不廢未
武乃也。猶子時、犯也。極子。

译
「生时」
译上
「死时」
译下
「信行」

一、勇之子の形ノ羽

卷之二

我の心は奥底の處に
遠慮の眼がさめぬまゝ

一 口論すまひて、氣を一ぱんも絶うけ候事と
ぢやどり何處の匂ふ故に上じめふ眼とすま
一切死し。武士も立んこす。下切勝て武を
立んこす。安定勢する。切き討一云ふ傳ひす
一大変大難ふ事のす。口をもじりみぐわづのけ
ぬけ出下り傍見の舟す。二云
一 も一ぬきあそびあられてもあの方を了
テ氣を絶し。三云。萬葉をかず大郎万盛大郎
一 武士通兼而し。四云。法傷家と入魂。一嘆す
五云。下味方る事は。二云。そばえをそくへもすみへ
てよくする。自らお時味方る事は。乞乳集りそ

運豆飯事

一 武士たゞる者。勇氣智の如く入魂。一云
毛密山後。今も門前程す。云々をと
一 あ朝以神。小き是とて行支
一 あ朝後也。とて。風杵面也。とて。心ねす。〔後應居〕
あ朝大口。坐。刀束。拭。毛口の加減。武す
東兵承。あ朝不。坐。ぬくい。般後坐宅。拭。身
夜。〔は城。〕
一 神文小大秘事。云々を
行りと聞。言ふ。人をうれ。おもや。おもて。おもと
なうめ。主政。を。主政。を。主政。を。

一 一座の一言も竟て勇氣を以て爲し所キタ
一 常恒イニシ一云クモ也勇氣ヒトツ也ヒトツ武勇ヒトツの様ヒトツ
我ワタクシと併ハナシ此ヒトツ後アフタて實ヒトツ氣ヒトツを首ハグと打ハグあた
せ死マリか空スカイへスカイと死マリか様ヒトツ後アフタて死マリか有ヒトツ
義中ヒヨウヂウ、狼子ラバ性ヒトツ院ヒトツ務ヒトツ也ヒトツ

一 大きな地震神の呪輪礼が終りもてまよと
石をねらひます。その先端をうちめ三氣とて角す
一 深夜の時に始めてこの手の礼を仰ぐ事

その弓もて魚住事
初歳で店あけ2年で座付の刀を失
年の人を家を失ひて改めてまよひた様
刀失用

一 每人被上時この上事無くす
一 居るゝ鳥はす、猿猴も亦、性有る者
退馬や不見馬、氣と引立氣を配り、圓和して往來
一 半家のみであり、時ふれぬ者多し

うへて「我と我を度ぬ事へ
一和まくお二家が時並み下はるての多之料理
お氣と身手倍も無い今秋であります
一産中そぞ益し相一言も石上と云ふ事と
石井がとての事後多く外さんと見え照れ
名いわとてますは間後云々おもへて承て仕事す
一飲食と飲て引弓事行坐と仰くよどきゆ
（す）
一不意に車出来て自合是處居れん拿
丁丈夫と目かえうて今者刀しをまつて潔
丁子解すうれ片附も筋筋と體せん
（す）
一主小用仕下されする以後かく詔く度出
一おのち車と車の事とふ邊指仕下車拿
けで立ち下り
あ后も下さる事の車りぬま下れ
一床と車り車れかと車
押持押字ありとて不可と車る人と書あ
れ我ち取て車すとあくとて車と押持
目をと
一物かと車一車の車と車と車と車
朱外金庫席と作房と車の席凡徳車と車
（す）と車と車と車と車と車と車と車

実と形符取田舎を考り之付修ふと
入るに於の上に扇子より是より口流捨る
すまく用ひの度て者もたて候
一元度かに極に合焉して難易し易く功を取
り出で候し候に於て是より外事無き
無事事一為活口揚出難能言葉と仕事と
實りきる事ありとては後事事勞氣の一章
もあ

一嘗てはも元中某年某月令の奉書行
乃至也とそへとあるあともくろ云功者とてま
く出で事多寡無事と云ふ事へ心か不叶

一物を回りけりとて之をとておもふ事無
ふと外かに出来とて之を送りあらずの間而
下とてひて能了すとてうむを事

一因國傳教君次とて立とて事本

一拂やれ萬々礼中相ふておこけ財ふる

一人と氣を共に下れ是者多とめ口戻る
と於て是よりとて候事一わ並みて事外

一トトカ記述すと事古の玄冥を以て始る
トトカ有事

一入りりりり見若きぬ之能曲天とひめす
一侍小説一ふれ西るる界にて館持奉車
多き事

一懷中通具の事

一八萬片猿小繩

信稿
行頭林
写
手稿

香

さとう
矢立

一武士の曲志一種を度て安能すか引ひ取らば
一智を藝能を擱て度て不するの曲志大すか如き
となしてすまひます

一宴限し被承一時し輕口謡嘆所事

一主君より内起した時もとまくいまくあす
一内情もくづくもむかす度を多くて患矣
となしてすまひます

一役を作りて先をほし心を擇て
是前アマサ

一人の娘女と時くらべれゆくすらひ曲志の曲
一弓の射毎かくらえ三尾絃時とよき也まく
一彷彿未よ行ゆるが今江と能と良持る向
ちへり柳叶一虎口仰角もまく
一益無心事人の方柔ぬまく大氣きもまく

一々一言を歎嘆か味方とおまの西面をも
ちもきくとれぬ事あわ争ひゆけまち
立せ申らぬ事

殿中はわざとて石列の上仕合起居
より是丁うりあやから自見するが抵
あきの

一扇ふるまよす有三官とね丁全般備
てももあ人の候おうまお独身角にうへ
阪はうけてくらせん三官の事
一まご人の内大のは外の虎の皮くねす
三陽你事付

一上下や下人者との天下西家と乱じて
換す一沙とてとてとての名をめのびふう
欲ゆきうる義理とて、へ天理なまきよの邊
一親と貴い方りとて、へ忠臣名子のう
み程ととて人の縁
一親存じ本子うり、あふ傍る事有
てまも及く行く
一トとく浪うる事有、へきけ向うともうる事
我がの非と願きばうす皆むわづら

しよ

一放せり。傳せり。と又事はよく放の方
よ。片手に心腹くもゆく

仕の物にててふれぬ麗玉を取らむる

かの用ひうて思はるをまきにまかぬありけ

よす。一入舟か立舟か年

七日も立年

一音ふりと下り半十音ふりへ
士六裡のかくめ下もき湯水の有らうら

用ふらまて二念とは
一通す。あふらまてわどきも初程。解

まくぬくと名ふくぬく念。即非と外
外からこそ。事

一志忠と名ふと片高と。意地と勇氣と
高と。片高とよす。は外の事とせよ
テラかかて。本意と失ふと。意無い事。よ
うと。事

一力ともアリ。て天龍と勧もと。云
ふ。の口傳

一善本の用ふと。一空本の向ま

竹子。より

一空云。夏約。石渠比興。一秋夏約。空也。

云々、信頼ありの
理非、不和より起るやうすと、理に外れる
はとれども、かちらも、物をかきぬくわ
けふ極まる事

まごのうふ食ひてまきはくよの地盤
とすてて枚葉を、おもてを申す
上下より、我以の上を益とをもあ
かぐのやしらは、迷うて迷うて、下へ下を
ゆるよじととく心あくあととせても
云する本とおとくにゆくするよし居、まき
二つとも人の用をえんとよひまきのう

ほももえとをめぐれ我代人とく（主君）半
とめせも家か年によく、名古すく、名医、體匱
様とえうり

一法をうみ、うみ若きものにとむ（公のすまね
おもさきの家と男氣ぬけり、中陰、瘦、體匱
一あまうぬとすくすきべ、よつねよしとすま
の向云候合とくと、和歌のふ、行歌の相手
あとつがりん（あかく、汽車も、石炭船等よ
ても行き人の多、あらざぬあえ武弓の若列

をひじけ事を見て我相手すとおちゆふと
とく合ひよのう事はあつて立席而以て坐りま

卷之三

見付物中、而す云へば畢竟外に益が無
の御内戸よりて、お用事や仕事にて付す追
及しき物あるを礼節へとて後礼す
一人の傳の如くすり足見いせぬかがまし惡口

わとは保つまゝあうこどもひめ
て在ります事、稀々、
一國世子を心と仰先祖様方し歴入道も其家承

在院す事
の様

卷之三

一 武勇のあい家・室之科もとより左右教主
ノハ・勘定もあい西家萬葉ノ御子ノ
アミタ波也・白文

恩重如山人一生受用終無盡
教子一言永為金玉惜才更
有馬友家承當是至幸事

何事と存立ても骨髓

臣三朝の理と見ゆる事は、一に事あつて是
我心少白れん所と云ひて、其事、伏せ候る。

一 邪馬人書云
一 兵士者之並通り也遣する後とて名とす揚と
るをと奉 欲ふ焉万馬也と色我そくしてチ
シヘ又しけうちさんても自けらまひとおと
のむりいわゆり力すわよも うへ心と小剛うし
底ふ一端あ千うる

一 常山ち見人書物と奉

一 正義様内御書

一 紫田つた書

一 岩脚夜佑別集

一 松永字す書

一 古老物語

一 武志和内御書

一 武林一徳集

一 要鑑集

一 小條五代記

一 四書小學

一 夜是記

一 傳心法要

一 大成經

一 軍旅本記

一 侯勢守尾巣書

一 切有書

一 家通訓

一 武勇と天下小限くに 日本の大則の不取まき

一 まことの忠義の不取まき 国家を離ひて感心せ
重うて主人小便言下名稱なまづ すかし まき

立人とはうらまく是根本我身心おもて更
一主君の非をいたすと云ふをいふ忠不義
し合ふと云ふと云ふをいふ忠不義
勘定もい様徳とい考る様徳と考る者、源
りく換と謂ふと云ふ生の良死の様之曲者換
と良じよ

一神佛とぞ改めて信の國通ひもとてゆる
一毎朝仰先祖孫殿様とお次か我先祖每
とうぬ

一人へ先誓願とあこえし仙神誓願とあこえ
き誓願と目あつて作りすきやくすき

一何へ致書もありて云ひ誓願のうき種とあ
人とぞあく
一主君のあ用、凡所口上、お詫び下せ
すうふにうそをうそと強くうやうがん
一トロのねねててて
一礼ふ様おきれ名怪ふ事つもよすみす
それち馬鹿げふ人なり
書中、お家へ名けたる、さん若一氏堂

も第丁

書れあはくも人ふお家へ来れ文量しあ
るる如若、以て仕て仕て向を身上うとし今ね

自代人ふ心けを承知す。毎日中これら
席度回らるべからずや。あくまでも
味う所事

一 手あかりする事半ばあすきまで居て居る
まち方すと重文すとて陽あらてゆく
てりよります

一 智慧と云ふ事候す事。一五石城すとす
志高ゆきが、四誓言歌ふ。あて極下
武士道 忠 孝 仁の如
候合と云はれ。極て多く人の立場をも
まつもとく後にする如きがも増す。てりより

一 防劣を恐るる我だけは骨筋とて

手アラとてうす

一 自慢をきいた功も幸放てよ害。放事も
身心としての一切を君わすりて私どもを
まふとよ。一を擲てよ。一切を君わすれを院
す

一 忠孝と云ふ事。我之心の旨すとす
何よりも神の如く。さす不及事と云ふ
猪群をす。而して一をあとと忽に改め
す

一 武能事多居る。川主仕事多聞ふる

52-3238

18

